

「ぼくの理想ではやはり女性には家庭に入っていただけ、家族を守ってほしいですね。お仕事のほうは続けて行かれないと？ でもなあ。それはちよつと。子供はそうだなあ、少なくとも一男一女、出来れば、いや、この際結婚前に仕事のほうは辞めていただくということで。ぼくの給料だけで十分あなたと子供くらいは養っていく自信はありますから。ところで家の話ですが、ぼくの実家は不動産を扱っていて……」

営業一筋に生きてきた男が立て板に水でまくしたてるのは、ちゃんと止まっていけないトイレの水が遠くでござござ言っているくらいにしか聞こえない。隣に座って上品な笑みを浮かべている叔母には申し訳ないのだけれど、何度やってもお見合いというのにはまったく興味が湧かない。

三十二にもなつて独り残っているのは私だけで、親も親戚も皆心配してくれるのは本当にありがたいとは思う反面、古い家柄の厳格な父が、娘四人を立派に育て終えたはいいけれど長女だけ売れ残つたとなると、躍起になつてその相手探しをするというのははや単なる私と父のゲームのようなもので、二十歳の誕生日にさつさと実家を出たついでに縁も切つておくんだったと、今さらながら後悔したりする。

銀縁の眼鏡越しに将来の夢を長々と語るこの会社員、大企業勤めで顔も良いほうだし、まくしたてるのをちよつとやめて黙っていれば、短足である以外はなかなか男前なのにとさえ思う。

そんなことを考えているとあくびが出てきて、それを一応かみ殺す努力をしていると、テーブルの下で足袋を履いた叔母の足がこちらのふくらはぎを蹴った。

やっつてらんないわ。

お見合い戦闘用として母がプレゼントしてくれたヴィトンのバッグを肩にひょいと担いで、ついに席を立ってしまった。叔母が「またか」という感じの、落胆しながらもちよつと小気味良さそうな、共犯者のような目を私に向ける。

何が起こっているのかわからない営業マンはだらしなく口をぽかんと開けてこちらを見つめ、たっぷり三秒かかってから「どちらへ・・・」とつぶやいた。

自信たっぷりのスマイルで振り返り、言い放った。

「仕事へ。本日はどうもお世話様」

これもまたお見合い用の十センチヒールを翻し、営業マンに背を向ける。約十五分間の、もう何度目かわからないお見合いがこうしてまた終わる。

代官山の潇洒なカフェの扉をそうして出て行くときに、バッグに突っ込んであった受令機をまた無造作に耳に差し込んだ。しつけの厳しかった母がいつも口を酸っぱくして言っていた様に、目に見えない一本の白線の上を、背筋を伸ばして闊歩する。

梨羽涼香、三十二歳。四姉妹最年長。警視庁交通機動隊自動二輪部隊員。

今日も亡き母の訓示を思い出してガシガシ行くとするわ。

一つ、自分の背中が、決して惨めに見えないように。

一つ、毅然として、誰にも隙を見せないように。

一つ、山頂に一輪咲く、気高い花のように。

「で、今回もダメだったんですか？」

「今回もダメって、それじゃ私のせいみたいじゃないですか」

「梨羽さんのせいでしょう？ 向こうは乗り気だったんだから」

そうやって目の前の元機動隊員は愉快そうにからからと笑った。悪気はないらしいのだが、笑われるとむかつ腹が立つ。「そもそも私はお見合いなんてしたいと思わないんです」

「だったらしなきゃいいんです。世の男どもはそれほど頑健ではないから」
「どういう意味ですか？」

「自分の美しさを知らないということは罪だという意味ですよ」と、優雅にコーヒーを啜りつつ自分を棚に上げてのたまう。

「二階堂さんには言われたくないですね」

「そういえば誠吾にもついこないだ同じようなことを言われた」

そんなことを言つて、また思い出したように笑い出す。

二階堂龍介は特殊犯捜査のトカゲ——特殊機動捜査自動二輪部隊である。

群馬県警鑑識課に二年いたあと本庁に吸い上げられて、バイク好きのために冷やかして受けた白バイ試験に合格してしまつたはいいが、交通機動隊には向いていないからとその後自分で特殊犯に異動願いを出したのだった。それは学生時代から二十二年もの友人付き合いという一課切つての硬派、朝倉誠吾を追つてとか追わぬとか。ちよつと見ないくらい整つた顔つきのせいで、本庁に入った当時は浅ましい上昇志向をむき出しにする刑事たちの間で、意地の悪い憶測が飛び交つたものだった。しかし本人は至つてのどかな性格で、山梨の地元にしたころの山登りがどうの、実家の畑のトマトがどうのと、出動でバイクにまたがると途端に目に異様な輝きが宿り人格が豹変することを除いては、普段は良家で育つた坊ちゃんタイプである。

二階堂が機動隊を去る時には、男女とも隊員全員が必死で引き止めたほどに、警察組織には珍しい人当たりのよさと清涼な物腰で常に人気を博していて、人使いの荒い捜査一課でいっただけだけ苦労しているかと気遣えば、本人は至つて飄々と「最悪状態がおもしろい」などとうそぶくのだった。

二階堂とはどうしてか気が合い、警視庁の全女性から刺すような敵意を浴びながらも、たまにこうして休憩時に一緒になつたりする。もつとも、こちらの当初の標的は彼の「親友」朝倉誠吾で、敵を知るなら仲間からというやつで、とりあえず二階堂に近づいたというのが本音であつただけれど、この元機動隊員と特殊犯警部補が一緒にいるところを見るにつけ、二十二年の歳月にはやはり勝てないというか、何だか途中でこちらの気持ちはどうでもよくなつてしまったというか、最近は自分の思いすらそうして曖昧に濁つている。それは偏に庁内すべての人間を上下に関わらず、逮捕した犯人までも苗字、さん付けで呼び、丁寧な言葉で話しかける二階堂が、唯一名前を呼びタメ口を利く相手が朝倉誠吾であり、そんな誠吾が唯一自然な笑顔で語りかける相手が二階堂だからだ。

警視庁で一、二を争う容姿を持つこの二人が捜査本部から一步出た途端、そういえば二重橋前の吉野家は他のところと比べて牛肉の量が少ないと二階堂が言えば、牛丼で思い出したがゆうべ買い物するのを忘れたからお前んちのネギを貸してくれと誠吾が言い、昨日はマンシヨンの掃除当番だったのに当直と出勤が続いて帰ってないからきつと張り紙がしてあると二階堂がぼやけば、そんな張り紙はへのもへじを描いて突き返せなどと誠吾が笑っているのを聞いていて、こんなふうな信頼関係を築けるといふのは、いったいどういふことなんだろうと、いつも考えてしまう。

傍から見れば性格は水と油ほどに違つて見えるのに、そこにあるのは純粹な、お互いがお互いのそばにすることが当たり前というふうな、それはまるでいにしえからの約束だったような、そのあまりにも自然な二人の様子は時に、とてつもなく隠微な感じがしないでもない。自分が誠吾を女の目で見ていたから、なおさらそう感じたのかもしれないけれど。

本人たちは互いのほんとうの気持ちに、気づいているのか、いないのか……。

姪にお見合いをさせるのが趣味の叔母ではないけれど、このおぼこい男同士を見ていて逆に焚きつけたくなる心境というか、最近はそのようなところである。そうして結局まあいいかと笑つて自分の気持ちに蓋をし、そのうち蓋をしたことすら忘れてしまうのよ。

おかあさん、涼香は今日も元気で。